

毛糸の帽子



書店の実用書コーナーに編み物の本が並び季節となった。しかし昔のものに比べると、単純で種類もずっと少ない。今や実用というよりは、趣味の世界の物となっている。四、五十年ほど前までは、セーターといえば全て手編みのものだった。

母は子供たちに順番に編んで着せてくれた。当時は一つのセーターで一冬過ごしたものである。いたずら坊主の弟の袖口は鼻水を横拭きするのでピカピカ光っていた。思えば当時は青鼻を二本垂らしている子供たちが多かった。青鼻も栄養不足から垂れるのだそうで、今やそんな顔にお目には掛かれないことにも、日本は豊かになったと言えるのだろう。戦後の一時期は、自分が着たいものは自分で縫ったり編んだりしなくてはならない時代だった。

た。おしゃれた女学生として私は、従姉妹たちと古いセーターを解き、その糸を染めたり蒸したりして、編み直しては、その出来ばえを競ったものだった。

編み物機が出回ったのは戦後六、七年経ってからで、編み針のへらを動かすのに、一メートルほどの物差しのような矢を、ザザッと突っ込んだり抜いたりする方式だった。珍し物好きの高校生だった私は、母にねだって買ってもらい、編み物教室にも通ったことがあった。編み込み模様の入ったグリーンのカーディガンを編んだ記憶がある。しかし受験勉強が始まり上京したので、それは二度と使われることのないまま行方知れずとなった。

結婚後、髪の毛の量が多く、目の前に垂れてくる髪をかき揚げていた夫のために、黒いネットのような帽子をかぎ針で工夫して編んだことがあった。仕上がりは上々でしばらくは愛用していたが、いつか外で飲んだ折に、落として来てしまったらしく見かけなくなった。その後は忙しいまま、子供たちの

物など編み物教室の先生に頼んだり、出来合いの物を買って済ませ、編み針を持つこともなかった。

定年になって鹿児島に戻り、三度目の秋を迎えた。手すさびに何か編んでみようと思いついて、書店で小物編みの本を買った。先ずは手持ちの灰色の毛糸で夫の帽子を編むことにした。

若かりし頃の溢れんばかりに豊かだった髪は何処へいったやら、額は広く禿げ上がってまばらの髪も白髪に近い胡麻塩となっている。これでは床屋さんへ行くまでもないと、毎月私がバリカンで三分刈りの丸坊主にするようになった。毛糸の帽子は冬の寒さしのぎになるだろう。

丁度、川内に行くという短歌会の先輩に棒針を買って来てもらって、その晩から早速編み始めた。ダイヤの編み模様に入ったスキー帽で、複雑な模様編みには、一目一目数えながら本とにらめっこである。始めたら夢中になるたちなので、NHKの長江下りの実況を聞きながらも、手を休めず、三日目に完成した。糸が太くきつめにしっかり編んだの

でとても暖かそうである。

お揃いに私のも編もうと糸を取り出して気がついた。いつの間にか右手がむくみ、指の屈伸が痛むのである。力を入れて編んだせいであつた。昔はグーパーで治つたのに、若い頃とはこんなところも違ふのだ。

一三日して痛みがとれたら、今度はもっとゆっくりと指をだましつゝ、楽しみながら編もうと思つている。

（平成8年12月）